

僕は後悔していない

表門を出て、ぼろりと後ろの彼女に、「さいなら」と、思わず、言葉が出てしまった。

その瞬間、僕は、「あっ」と思ったが、もう遅い！
彼女の足がそこで止まった。

僕は、そのまま来た道を、駅の方へ、振り返らず、歩き出した。
心の中で、大人の僕が叫んだ。

取り消せ！

彼女の方を向け！

彼女のそばへ行け！

彼女の手を取れ！

もう一度、頼め！

少なくとも、今日は一緒にいてと言え！

僕の家まで案内するからと言え！

僕のお母さん、家族を紹介するから！

僕は不良でも何でもない！

安心してください！

あなたと、友達になりたいだけです！

なぜ、それが言えないのか！

しばらくして、僕は振り返った。

彼女は、表門へと入るところで、

僕が振り返った事には、気が付かないで、消えて行った。

僕は、じっとそこにしばらく立ったままだった。